

医療の歴史は ステイグマの歴史

■「患者様」から「患者さん」へ

私が以前に勤務した病院は、「患者様」と呼ばない病院でした（正確には呼ぶのをやめた病院）。「患者様」呼称は患者中心の医療を志向する医療界の流れの中で普及しましたが、病院の患者さんから「違和感がある」「よそよそしさと冷たさを感じる」「患者さんの方が親しみを感じる」などの声が多数あり、患者・職員ともに「さん」で十分との意見が7割を占めたことから「患者様」から「患者さん」へ変えたのです。さらに「患者様」呼称が一部の人の誤った権利意識や変なお客様意識を助長しているとの指摘もあり、「ホテルやお店での客と従業員の関係とは異なり、患者と医療者は対等であるべき」との意見にも配慮しました。実際のところ、「音楽家」という呼び名がふさわしい場面もあれば、「ミュージシャン」という呼び名が



しつくりくる時

もあるように、「患者様」という呼び名から受ける印象はその場の状況や個人の受け止め方により大きく異なります。「肝心なのは言葉ではなく心の持ち方と実際の行動である」と言われればその通りなのですが、無意識の思い込みや無自覚な偏見を防ぐためにも言葉の問題は決して小さなことではないと思うのです。

■「糖尿病」という名前

言葉といえば、「糖尿病」という病名から受けるネガティブなイメージやステイグマ（偏見、負の烙印）が近年問題となつていきます。糖尿病という名前は「蜜のように甘い尿がサイフォンのようにあふれ出る」という記載に由来しており、日本では江戸時代にオランダから西洋医学が伝わり「蜜尿病」などを経て「糖尿病」に統一されました。この糖尿病という名称には「生活習慣病」の語感から来る不適切なイメージがあり、「食べすぎや不摂生が原因」「自己管理ができていない」などと本人のプライドを傷つけ、治療中断を招いたり社会的な不利益を生じさせています。1型糖尿病は自己免疫異常やウイルス感染などを契機に発症するもので生活習慣とは無関係であり、糖尿病全体の9割以上を占める2型糖尿病の一部にも遺伝的な体質が関与



しており自己責任だけの病気ではありません。アンケート調査の結果では「糖尿病」という病名に患者の9割が抵抗感や不快

感を感じており、8割が病名変更を希望していました（日本糖尿病協会の調査）。このため、糖尿病のある人が負い目を感じたり肩身の狭い思いをせず、気兼ねなく治療が受けられるような社会を目指して病名変更の議論が進んでいます。なお過去に病名変更した例として「精神分裂病」→「統合失調症」「痴呆（症）」→「認知症」があり、いずれも病名自体が患者さん的人格を否定したり尊厳を傷つけ、病気の実態を正しく表していませんでした。

■無知と差別と偏見と

伝説のロックバンド「クイーン」のボーカルだったフレディ・マーキュリーは、移民（ペルシャ系インド人）、宗教（ゾロアスター教）、性的マイノリティ（バイセクシャル）、そして病気（エイズ）という様々な差別や偏見、古い価値観に苦しみなながらも、20世紀最大のチャリティー音楽イベント「ライブ・エイド」（1985年）では観客と一体になり圧巻のパフォーマンスを演じました。

彼が罹患したHIV（エイズ）は過去に差別を受けた病気の代表ですが、私が長年診療している結核もまた社会から差別され偏見を持たれる病気として、患者さんやその家族は孤立感や疎外感を感じてきました。「周囲に噂され嫌われる病気」「人には話せない病気」として、社会的汚名や人権侵害に苦しんだ歴史があったのです。肺病の患者がいると親は子供に「あの家の子とは遊ばな」と言ったり、結核の出た家の前を鼻をつまんで走り去ったのも決して遠い過去のことではなかったのです。差別は偏見に基づいており、偏見の裏には無知と恐怖が潜んでいます。差別・偏見・思い込み…、コロナ禍を経験した現在でも私たちの周囲には（そして心の中にも）目に見えない無意識のステイグマが沢山あるのではないのでしょうか。



沼尾 利郎
ぬまおとしお

日光市生まれ。宇都宮高校、獨協医科大学卒業後、米国留学を経て塩谷総合病院副院長、国立病院機構宇都宮病院院長を歴任。現在は同病院名誉院長として宇都宮セントラルクリニック等で診療。専門は呼吸器、アレルギー、スポーツ医学など。